

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	森田 学
主な担当科目	オペラの歴史と作品,基礎イタリア語,初級イタリア語
シラバス	次ページをご参照ください
2022年の教育目標・授業に臨む姿勢	本年度の教育目標は、学生が履修している科目において何を学び取るかをシラバスから読み取り、それに向けた事前準備を自ら行い、目標に到達できるよう導くことである。学生の授業での学びが卒業のための単位習得だけを目的とした受動的なものではなく、自らの専門分野での学びをより豊かなものにする基盤となるような指導を常に念頭に授業に臨みたい。
2022年の教育に関する自己評価	語学(イタリア語)教育に関して、2021年度は実施できなかった基礎イタリア語補習を12月20日(2コマ)に実施した。「自分の力で辞書を引き、簡単な文章や歌の歌詞の意味を知ることができる」という目標を達成するために、優れた翻訳機能が利用できる時代に外国語を学ぶ意義や品詞・構文理解を地道に行う重要性について触れ、そこで養った力が専門分野でも応用できることを伝えることがコメントペーパーから確認できた。遠回りではあっても、規則を機械的にインプットさせるのではなく、なぜ規則が存在するのかを丁寧に伝えることが重要だと思われる。
2022年のFD活動に関する自己評価	これまで科目単位でFD研修会を見ることが多かったが、大学設置基準変更で求められているポイントや今後の大学入学者数減少と本学の教育のあり方を総合的かつ広い視点を持って捉えることができた。また、今後は教員も教育を主に担う学園の一職員としてより良い教育を提供するために何ができるのかを常に考えつつ委員会や教育・研究活動に臨んでいることが大きな収穫である。
授業改善のために取り入れた研修内容	GPAのシステムとその活用法を再考することで、科目で設定する到達目標と成績評価、さらにはカリキュラム・ポリシーおよびディプロマ・ポリシーにおける担当科目の位置を再認識した。シラバスに示す評価基準を学生がより明確に理解できるような記載方法を教育課程委員会に提出した。さらには、本学におけるGPAの理想的な形をアセスメントプランとの関わりの中で考えて行きたい。

科目名－クラス名

オペラの歴史と作品

A

曜日時限

水 3時限

担当教員

森田 学

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
講義	2～	通年	4		50	0	0	0	50	100

教育到達目標と概要

オペラの価値と楽しみ方を知り、その再現・創造にかかわるための基礎を作ることが目的である。オペラが誕生してから今日までの変化・発展をたどりつつ、歴史のさまざまな時代に、さまざまな国で、それぞれの文化的・音楽的土壌からどのようなオペラが生まれたかを俯瞰する。授業は講義形式で、原則として時代順に進める。時間の許す限り、音や映像で実際の音楽や舞台を確認したい。数多くの作曲家や作品名が出るが、ポイントになる人名・作品名・事項の暗記は必須となる。

学修成果

①オペラとその歴史についてアカデミックな知識を持つことができる。②実際にオペラを見る時に、その作品の価値や楽しみ方がわかり、人にも説明することができる。③歴史的に重要なオペラをベースに、知識をさらに専門的に広げるための方法がわかる。

授業展開と内容

第1回	オペラとは何か。誕生と初期のオペラの特徴。
第2回	モンテヴェルディとヴェネツィア派。ルネサンスからバロックへの移行。
第3回	ナポリ派 / オペラ発展の基礎。セリアとブッフア。諸外国への広まり。
第4回	ナポリ派とオペラ改革 / ソプラノとカストラートの活躍。グルックなどのオペラ改革とその意味。
第5回	フランスのオペラ リュリからラモーまで。イタリアの影響とフランスの独自性。
第6回	オペラ作曲家モーツァルトⅠ / オペラ・セリアとオペラ・ブッフア。独自性。
第7回	モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》Ⅰ / 物語、音楽、楽曲構造。
第8回	モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》Ⅱ / 作品の特徴、評価。
第9回	ドイツ・オペラの始まり / ドイツにおけるオペラの状況。モーツァルトのジングシュピール。ウェーバー。
第10回	ベルカントの頂点 / ロッシーニのオペラとその特徴。
第11回	イタリア・オペラの形式 / ロッシーニ
第12回	ロマン主義の兆し Ⅰ / ベッリーニとドニゼッティのオペラ。
第13回	ロマン主義の兆し Ⅱ / 新しいベルカント。歌唱様式の変化。
第14回	フランス風のグランド・オペラ その歴史的意義と影響。
第15回	前期のまとめ。
第16回	ヴェルディのオペラ Ⅰ / 初期と中期 ヴェルディの発展。
第17回	ヴェルディのオペラ Ⅱ / 後期 音楽とドラマの融合、後世への影響。
第18回	ヴェルディ《リゴレット》Ⅰ / 物語、音楽、楽曲構造。
第19回	ヴェルディ《リゴレット》Ⅱ / 作品の特徴、評価。
第20回	ワーグナーのオペラ Ⅰ / ワーグナーのオペラの発展。
第21回	ワーグナーのオペラ Ⅱ / 理論と実践。ワーグナーの歴史的意義。
第22回	フランスのオペラ・コミックとドラマ・リリック。
第23回	イタリアのヴェリズモ・オペラ / ヴェリズモの定義とその歴史的位罫。
第24回	プッチーニとそのライバルたち。イタリアの世紀末。
第25回	オペレッタ / オッフェンバック、J・シュトラウス、ウィーンの世紀末。
第26回	民族主義オペラ / ロシアと東欧諸国における新しい動向。
第27回	20世紀の諸相 Ⅰ / ドイツ・オーストリア（R・シュトラウス、表現主義）、フランス（ドビュッシーほか）。
第28回	20世紀の諸相 Ⅱ / ロシア、チェコ、イタリア、イギリス、アメリカなど。
第29回	オペラ史のさまざまな視点 / 作品の今日的評価、演奏、歌手など。
第30回	総括

履修上の注意

授業では断片的ながら映像を見ることが多い。私語等で周囲に迷惑をかけないように、遅刻入室で鑑賞の妨げにならないよう注意すること。前期末の授業内に小テストを行なう。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- 授業後に学んだ内容の要点を自分で整理し、不足する知識は西洋音楽史を復習しつつ確実に身に付けること。
 - この科目は「通年4単位」の講義で、毎回の授業に対して180分の授業外学修をすることを意味します（1週間に3時間の自学自修が必要）。これは机に向かって勉強するだけでなく、CDやDVDを利用して作品を聴いたり、観たりする時間も自学自修に含まれます。
 - 公欠や理由のある欠席の場合も求められる自学自修を行っておくこと。
 - 遅刻は授業開始後20分以内、早退は授業終了前20分以内となる。それ以外は欠席とする。
-

教科書・参考書

【教科書】岸本宏子ほか『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』アルテスパブリッシング

科目名－クラス名

オペラの歴史と作品

B

曜日時限

水 4時限

担当教員

森田 学

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
講義	2～	通年	4		50	0	0	0	50	100

教育到達目標と概要

オペラの価値と楽しみ方を知り、その再現・創造にかかわるための基礎を作ることが目的である。オペラが誕生してから今日までの変化・発展をたどりつつ、歴史のさまざまな時代に、さまざまな国で、それぞれの文化的・音楽的土壌からどのようなオペラが生まれたかを俯瞰する。授業は講義形式で、原則として時代順に進める。時間の許す限り、音や映像で実際の音楽や舞台を確認したい。数多くの作曲家や作品名が出るが、ポイントになる人名・作品名・事項の暗記は必須となる。

学修成果

①オペラとその歴史についてアカデミックな知識を持つことができる。②実際にオペラを見る時に、その作品の価値や楽しみ方がわかり、人にも説明することができる。③歴史的に重要なオペラをベースに、知識をさらに専門的に広げるための方法がわかる。

授業展開と内容

第1回	オペラとは何か。誕生と初期のオペラの特徴。
第2回	モンテヴェルディとヴェネツィア派。ルネサンスからバロックへの移行。
第3回	ナポリ派 / オペラ発展の基礎。セリアとブッフア。諸外国への広まり。
第4回	ナポリ派とオペラ改革 / ソプラノとカストラートの活躍。グルックなどのオペラ改革とその意味。
第5回	フランスのオペラ リュリからラモーまで。イタリアの影響とフランスの独自性。
第6回	オペラ作曲家モーツァルト I / オペラ・セリアとオペラ・ブッフア。独自性。
第7回	モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》I / 物語、音楽、楽曲構造。
第8回	モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》II / 作品の特色、評価。
第9回	ドイツ・オペラの始まり / ドイツにおけるオペラの状況。モーツァルトのジグシュピール。ウェーバー。
第10回	ベルカントの頂点 / ロッシーニのオペラとその特色。
第11回	イタリア・オペラの形式 / ロッシーニ
第12回	ロマン主義の兆し I / ベッリーニとドニゼッティのオペラ。
第13回	ロマン主義の兆し II / 新しいベルカント。歌唱様式の変化。
第14回	フランス風のグランド・オペラ その歴史的意義と影響。
第15回	前期のまとめ。
第16回	ヴェルディのオペラ I / 初期と中期 ヴェルディの発展。
第17回	ヴェルディのオペラ II / 後期 音楽とドラマの融合、後世への影響。
第18回	ヴェルディ《リゴレット》I / 物語、音楽、楽曲構造。
第19回	ヴェルディ《リゴレット》II / 作品の特色、評価。
第20回	ワーグナーのオペラ I / ワーグナーのオペラの発展。
第21回	ワーグナーのオペラ II / 理論と実践。ワーグナーの歴史的意義。
第22回	フランスのオペラ・コミックとドラマ・リリック。
第23回	イタリアのヴェリズモ・オペラ / ヴェリズモの定義とその歴史的位罫。
第24回	プッチーニとそのライバルたち。イタリアの世紀末。
第25回	オペレッタ / オッフエンバック、J・シュトラウス、ウィーンの世紀末。
第26回	民族主義オペラ / ロシアと東欧諸国における新しい動向。
第27回	20世紀の諸相 I / ドイツ・オーストリア（R・シュトラウス、表現主義）、フランス（ドビュシーほか）。
第28回	20世紀の諸相 II / ロシア、チェコ、イタリア、イギリス、アメリカなど。
第29回	オペラ史のさまざまな視点 / 作品の今日的評価、演奏、歌手など。
第30回	総括

履修上の注意

授業では断片的ながら映像を見ることが多い。私語等で周囲に迷惑をかけないように、遅刻入室で鑑賞の妨げにならないよう注意すること。前期末の授業内に小テストを行なう。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- 授業後に学んだ内容の要点を自分で整理し、不足する知識は西洋音楽史を復習しつつ確実に身に付けること。
 - この科目は「通年4単位」の講義で、毎回の授業に対して180分の授業外学修をすることを意味します（1週間に3時間の自学自修が必要）。これは机に向かって勉強するだけでなく、CDやDVDを利用して作品を聴いたり、観たりする時間も自学自修に含まれます。
 - 公欠や理由のある欠席の場合も求められる自学自修を行っておくこと。
 - 遅刻は授業開始後20分以内、早退は授業終了前20分以内となる。それ以外は欠席とする。
-

教科書・参考書

【教科書】岸本宏子ほか『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』アルテスパブリッシング

科目名－クラス名

オペラの歴史と作品

音楽と社会 A

曜日時限

水 3時限

担当教員

森田 学

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
講義	1～	通年	4	50	0	0	0	50	100

教育到達目標と概要

オペラの価値と楽しみ方を知り、その再現・創造にかかわるための基礎を作ることが目的である。オペラが誕生してから今日までの変化・発展をたどりつつ、歴史のさまざまな時代に、さまざまな国で、それぞれの文化的・音楽的土壌からどのようなオペラが生まれたかを俯瞰する。授業は講義形式で、原則として時代順に進める。時間の許す限り、音や映像で実際の音楽や舞台を確認したい。数多くの作曲家や作品名が出るが、ポイントになる人名・作品名・事項の暗記は必須となる。

学修成果

①オペラとその歴史についてアカデミックな知識を持つことができる。②実際にオペラを見る時に、その作品の価値や楽しみ方がわかり、人にも説明することができる。③歴史的に重要なオペラをベースに、知識をさらに専門的に広げるための方法がわかる。

授業展開と内容

- 第1回 オペラとは何か。誕生と初期のオペラの特徴。
- 第2回 モンテヴェルディとヴェネツィア派。ルネサンスからバロックへの移行。
- 第3回 ナポリ派 / オペラ発展の基礎。セリアとブッフア。諸外国への広まり。
- 第4回 ナポリ派とオペラ改革 / ソプラノとカストラートの活躍。グルックなどのオペラ改革とその意味。
- 第5回 フランスのオペラ リュリからラモーまで。イタリアの影響とフランスの独自性。
- 第6回 オペラ作曲家モーツァルト I / オペラ・セリアとオペラ・ブッフア。独自性。
- 第7回 モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》I / 物語、音楽、楽曲構造。
- 第8回 モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》II / 作品の特色、評価。
- 第9回 ドイツ・オペラの始まり / ドイツにおけるオペラの状況。モーツァルトのジグシュピール。ウェーバー。
- 第10回 ベルカントの頂点 / ロッシーニのオペラとその特色。
- 第11回 イタリア・オペラの形式 / ロッシーニ
- 第12回 ロマン主義の兆し I / ベッリーニとドニゼッティのオペラ。
- 第13回 ロマン主義の兆し II / 新しいベルカント。歌唱様式の変化。
- 第14回 フランス風のグランド・オペラ その歴史的意義と影響。
- 第15回 前期のまとめ。
- 第16回 ヴェルディのオペラ I / 初期と中期 ヴェルディの発展。
- 第17回 ヴェルディのオペラ II / 後期 音楽とドラマの融合、後世への影響。
- 第18回 ヴェルディ《リゴレット》I / 物語、音楽、楽曲構造。
- 第19回 ヴェルディ《リゴレット》II / 作品の特色、評価。
- 第20回 ワーグナーのオペラ I / ワーグナーのオペラの発展。
- 第21回 ワーグナーのオペラ II / 理論と実践。ワーグナーの歴史的意義。
- 第22回 フランスのオペラ・コミックとドラマ・リリック。
- 第23回 イタリアのヴェリズモ・オペラ / ヴェリズモの定義とその歴史的位罫。
- 第24回 プッチーニとそのライバルたち。イタリアの世紀末。
- 第25回 オペレッタ / オッフエンバック、J・シュトラウス、ウィーンの世紀末。
- 第26回 民族主義オペラ / ロシアと東欧諸国における新しい動向。
- 第27回 20世紀の諸相 I / ドイツ・オーストリア (R・シュトラウス、表現主義)、フランス (ドビュッシーほか)。
- 第28回 20世紀の諸相 II / ロシア、チェコ、イタリア、イギリス、アメリカなど。
- 第29回 オペラ史のさまざまな視点 / 作品の今日的評価、演奏、歌手など。
- 第30回 総括

履修上の注意

授業では断片的ながら映像を見ることが多い。私語等で周囲に迷惑をかけないように、遅刻入室で鑑賞の妨げにならないよう注意すること。前期末の授業内に小テストを行なう。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- 授業後に学んだ内容の要点を自分で整理し、不足する知識は西洋音楽史を復習しつつ確実に身に付けること。
- この科目は「通年4単位」の講義で、毎回の授業に対して180分の授業外学修をすることを意味します（1週間に3時間の自学自修が必要）。これは机に向かって勉強するだけでなく、CDやDVDを利用して作品を聴いたり、観たりする時間も自学自修に含まれます。
- 公欠や理由のある欠席の場合も求められる自学自修を行っておくこと。
- 遅刻は授業開始後20分以内、早退は授業終了前20分以内となる。それ以外は欠席とする。

教科書・参考書

【教科書】岸本宏子ほか『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』アルテスパブリッシング

科目名－クラス名

オペラの歴史と作品

音楽と社会B

曜日時限

水 4時限

担当教員

森田 学

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
講義	1～	通年	4		50	0	0	0	50	100

教育到達目標と概要

オペラの価値と楽しみ方を知り、その再現・創造にかかわるための基礎を作ることが目的である。オペラが誕生してから今日までの変化・発展をたどりつつ、歴史のさまざまな時代に、さまざまな国で、それぞれの文化的・音楽的土壌からどのようなオペラが生まれたかを俯瞰する。授業は講義形式で、原則として時代順に進める。時間の許す限り、音や映像で実際の音楽や舞台を確認したい。数多くの作曲家や作品名が出るが、ポイントになる人名・作品名・事項の暗記は必須となる。

学修成果

①オペラとその歴史についてアカデミックな知識を持つことができる。②実際にオペラを見る時に、その作品の価値や楽しみ方がわかり、人にも説明することができる。③歴史的に重要なオペラをベースに、知識をさらに専門的に広げるための方法がわかる。

授業展開と内容

- 第1回 オペラとは何か。誕生と初期のオペラの特徴。
- 第2回 モンテヴェルディとヴェネツィア派。ルネサンスからバロックへの移行。
- 第3回 ナポリ派 / オペラ発展の基礎。セリアとブッフア。諸外国への広まり。
- 第4回 ナポリ派とオペラ改革 / ソプラノとカストラートの活躍。グルックなどのオペラ改革とその意味。
- 第5回 フランスのオペラ リュリからラモーまで。イタリアの影響とフランスの独自性。
- 第6回 オペラ作曲家モーツァルトⅠ / オペラ・セリアとオペラ・ブッフア。独自性。
- 第7回 モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》Ⅰ / 物語、音楽、楽曲構造。
- 第8回 モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》Ⅱ / 作品の特色、評価。
- 第9回 ドイツ・オペラの始まり / ドイツにおけるオペラの状況。モーツァルトのジグシュピール。ウェーバー。
- 第10回 ベルカントの頂点 / ロッシーニのオペラとその特色。
- 第11回 イタリア・オペラの形式 / ロッシーニ
- 第12回 ロマン主義の兆し Ⅰ / ベッリーニとドニゼッティのオペラ。
- 第13回 ロマン主義の兆し Ⅱ / 新しいベルカント。歌唱様式の変化。
- 第14回 フランス風のグランド・オペラ その歴史的意義と影響。
- 第15回 前期のまとめ。
- 第16回 ヴェルディのオペラ Ⅰ / 初期と中期 ヴェルディの発展。
- 第17回 ヴェルディのオペラ Ⅱ / 後期 音楽とドラマの融合、後世への影響。
- 第18回 ヴェルディ《リゴレット》Ⅰ / 物語、音楽、楽曲構造。
- 第19回 ヴェルディ《リゴレット》Ⅱ / 作品の特色、評価。
- 第20回 ワーグナーのオペラ Ⅰ / ワーグナーのオペラの発展。
- 第21回 ワーグナーのオペラ Ⅱ / 理論と実践。ワーグナーの歴史的意義。
- 第22回 フランスのオペラ・コミックとドラマ・リリック。
- 第23回 イタリアのヴェリズモ・オペラ / ヴェリズモの定義とその歴史的位罫。
- 第24回 プッチーニとそのライバルたち。イタリアの世紀末。
- 第25回 オペレッタ / オッフェンバック、J・シュトラウス、ウィーンの世紀末。
- 第26回 民族主義オペラ / ロシアと東欧諸国における新しい動向。
- 第27回 20世紀の諸相 Ⅰ / ドイツ・オーストリア（R・シュトラウス、表現主義）、フランス（ドビュシーほか）。
- 第28回 20世紀の諸相 Ⅱ / ロシア、チェコ、イタリア、イギリス、アメリカなど。
- 第29回 オペラ史のさまざまな視点 / 作品の今日的評価、演奏、歌手など。
- 第30回 総括

履修上の注意

授業では断片的ながら映像を見ることが多い。私語等で周囲に迷惑をかけないように、遅刻入室で鑑賞の妨げにならないよう注意すること。前期末の授業内に小テストを行なう。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- 授業後に学んだ内容の要点を自分で整理し、不足する知識は西洋音楽史を復習しつつ確実に身に付けること。
- この科目は「通年4単位」の講義で、毎回の授業に対して180分の授業外学修をすることを意味します（1週間に3時間の自学自修が必要）。これは机に向かって勉強するだけでなく、CDやDVDを利用して作品を聴いたり、観たりする時間も自学自修に含まれます。
- 公欠や理由のある欠席の場合も求められる自学自修を行っておくこと。
- 遅刻は授業開始後20分以内、早退は授業終了前20分以内となる。それ以外は欠席とする。

教科書・参考書

【教科書】岸本宏子ほか『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』アルテスパブリッシング

科目名－クラス名

オペラの歴史と作品

A

曜日時限

水 3時限

担当教員

森田 学

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
講義	2～	通年	4		50	0	0	0	50	100

教育到達目標と概要

オペラの価値と楽しみ方を知り、その再現・創造にかかわるための基礎を作ることが目的である。オペラが誕生してから今日までの変化・発展をたどりつつ、歴史のさまざまな時代に、さまざまな国で、それぞれの文化的・音楽的土壌からどのようなオペラが生まれたかを俯瞰する。授業は講義形式で、原則として時代順に進める。時間の許す限り、音や映像で実際の音楽や舞台を確認したい。数多くの作曲家や作品名が出るが、ポイントになる人名・作品名・事項の暗記は必須となる。

学修成果

①オペラとその歴史についてアカデミックな知識を持つことができる。②実際にオペラを見る時に、その作品の価値や楽しみ方がわかり、人にも説明することができる。③歴史的に重要なオペラをベースに、知識をさらに専門的に広げるための方法がわかる。

授業展開と内容

- 第1回 オペラとは何か。誕生と初期のオペラの特徴。
- 第2回 モンテヴェルディとヴェネツィア派。ルネサンスからバロックへの移行。
- 第3回 ナポリ派 / オペラ発展の基礎。セリアとブッフア。諸外国への広まり。
- 第4回 ナポリ派とオペラ改革 / ソプラノとカストラートの活躍。グルックなどのオペラ改革とその意味。
- 第5回 フランスのオペラ リュリからラモーまで。イタリアの影響とフランスの独自性。
- 第6回 オペラ作曲家モーツァルトⅠ / オペラ・セリアとオペラ・ブッフア。独自性。
- 第7回 モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》Ⅰ / 物語、音楽、楽曲構造。
- 第8回 モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》Ⅱ / 作品の特色、評価。
- 第9回 ドイツ・オペラの始まり / ドイツにおけるオペラの状況。モーツァルトのジングシュピール。ウェーバー。
- 第10回 ベルカントの頂点 / ロッシーニのオペラとその特色。
- 第11回 イタリア・オペラの形式 / ロッシーニ
- 第12回 ロマン主義の兆し Ⅰ / ベッリーニとドニゼッティのオペラ。
- 第13回 ロマン主義の兆し Ⅱ / 新しいベルカント。歌唱様式の変化。
- 第14回 フランス風のグランド・オペラ その歴史的意義と影響。
- 第15回 前期のまとめ。
- 第16回 ヴェルディのオペラ Ⅰ / 初期と中期 ヴェルディの発展。
- 第17回 ヴェルディのオペラ Ⅱ / 後期 音楽とドラマの融合、後世への影響。
- 第18回 ヴェルディ《リゴレット》Ⅰ / 物語、音楽、楽曲構造。
- 第19回 ヴェルディ《リゴレット》Ⅱ / 作品の特色、評価。
- 第20回 ワーグナーのオペラ Ⅰ / ワーグナーのオペラの発展。
- 第21回 ワーグナーのオペラ Ⅱ / 理論と実践。ワーグナーの歴史的意義。
- 第22回 フランスのオペラ・コミックとドラマ・リリック。
- 第23回 イタリアのヴェリズモ・オペラ / ヴェリズモの定義とその歴史的位罫。
- 第24回 プッチーニとそのライバルたち。イタリアの世紀末。
- 第25回 オペレッタ / オッフエンバック、J・シュトラウス、ウィーンの世紀末。
- 第26回 民族主義オペラ / ロシアと東欧諸国における新しい動向。
- 第27回 20世紀の諸相 Ⅰ / ドイツ・オーストリア（R・シュトラウス、表現主義）、フランス（ドビュッシーほか）。
- 第28回 20世紀の諸相 Ⅱ / ロシア、チェコ、イタリア、イギリス、アメリカなど。
- 第29回 オペラ史のさまざまな視点 / 作品の今日的評価、演奏、歌手など。
- 第30回 総括

履修上の注意

授業では断片的ながら映像を見ることが多い。私語等で周囲に迷惑をかけないように、遅刻入室で鑑賞の妨げにならないよう注意すること。前期末の授業内に小テストを行なう。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- 授業後に学んだ内容の要点を自分で整理し、不足する知識は西洋音楽史を復習しつつ確実に身に付けること。
- この科目は「通年4単位」の講義で、毎回の授業に対して180分の授業外学修をすることを意味します（1週間に3時間の自学自修が必要）。これは机に向かって勉強するだけでなく、CDやDVDを利用して作品を聴いたり、観たりする時間も自学自修に含まれます。
- 公欠や理由のある欠席の場合も求められる自学自修を行っておくこと。
- 遅刻は授業開始後20分以内、早退は授業終了前20分以内となる。それ以外は欠席とする。

教科書・参考書

【教科書】岸本宏子ほか『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』アルテスパブリッシング

科目名－クラス名

オペラの歴史と作品

B

曜日時限

水 4時限

担当教員

森田 学

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
講義	2～	通年	4		50	0	0	0	50	100

教育到達目標と概要

オペラの価値と楽しみ方を知り、その再現・創造にかかわるための基礎を作ることが目的である。オペラが誕生してから今日までの変化・発展をたどりつつ、歴史のさまざまな時代に、さまざまな国で、それぞれの文化的・音楽的土壌からどのようなオペラが生まれたかを俯瞰する。授業は講義形式で、原則として時代順に進める。時間の許す限り、音や映像で実際の音楽や舞台を確認したい。数多くの作曲家や作品名が出るが、ポイントになる人名・作品名・事項の暗記は必須となる。

学修成果

①オペラとその歴史についてアカデミックな知識を持つことができる。②実際にオペラを見る時に、その作品の価値や楽しみ方がわかり、人にも説明することができる。③歴史的に重要なオペラをベースに、知識をさらに専門的に広げるための方法がわかる。

授業展開と内容

- 第1回 オペラとは何か。誕生と初期のオペラの特徴。
- 第2回 モンテヴェルディとヴェネツィア派。ルネサンスからバロックへの移行。
- 第3回 ナポリ派 / オペラ発展の基礎。セリアとブッフア。諸外国への広まり。
- 第4回 ナポリ派とオペラ改革 / ソプラノとカストラートの活躍。グルックなどのオペラ改革とその意味。
- 第5回 フランスのオペラ リュリからラモーまで。イタリアの影響とフランスの独自性。
- 第6回 オペラ作曲家モーツァルトⅠ / オペラ・セリアとオペラ・ブッフア。独自性。
- 第7回 モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》Ⅰ / 物語、音楽、楽曲構造。
- 第8回 モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》Ⅱ / 作品の特色、評価。
- 第9回 ドイツ・オペラの始まり / ドイツにおけるオペラの状況。モーツァルトのジングシュピール。ウェーバー。
- 第10回 ベルカントの頂点 / ロッシーニのオペラとその特色。
- 第11回 イタリア・オペラの形式 / ロッシーニ
- 第12回 ロマン主義の兆し Ⅰ / ベッリーニとドニゼッティのオペラ。
- 第13回 ロマン主義の兆し Ⅱ / 新しいベルカント。歌唱様式の変化。
- 第14回 フランス風のグランド・オペラ その歴史的意義と影響。
- 第15回 前期のまとめ。
- 第16回 ヴェルディのオペラ Ⅰ / 初期と中期 ヴェルディの発展。
- 第17回 ヴェルディのオペラ Ⅱ / 後期 音楽とドラマの融合、後世への影響。
- 第18回 ヴェルディ《リゴレット》Ⅰ / 物語、音楽、楽曲構造。
- 第19回 ヴェルディ《リゴレット》Ⅱ / 作品の特色、評価。
- 第20回 ワーグナーのオペラ Ⅰ / ワーグナーのオペラの発展。
- 第21回 ワーグナーのオペラ Ⅱ / 理論と実践。ワーグナーの歴史的意義。
- 第22回 フランスのオペラ・コミックとドラマ・リリック。
- 第23回 イタリアのヴェリズモ・オペラ / ヴェリズモの定義とその歴史的位罫。
- 第24回 プッチーニとそのライバルたち。イタリアの世紀末。
- 第25回 オペレッタ / オッフエンバック、J・シュトラウス、ウィーンの世紀末。
- 第26回 民族主義オペラ / ロシアと東欧諸国における新しい動向。
- 第27回 20世紀の諸相 Ⅰ / ドイツ・オーストリア（R・シュトラウス、表現主義）、フランス（ドビュッシーほか）。
- 第28回 20世紀の諸相 Ⅱ / ロシア、チェコ、イタリア、イギリス、アメリカなど。
- 第29回 オペラ史のさまざまな視点 / 作品の今日的評価、演奏、歌手など。
- 第30回 総括

履修上の注意

授業では断片的ながら映像を見ることが多い。私語等で周囲に迷惑をかけないように、遅刻入室で鑑賞の妨げにならないよう注意すること。前期末の授業内に小テストを行なう。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

- 授業後に学んだ内容の要点を自分で整理し、不足する知識は西洋音楽史を復習しつつ確実に身に付けること。
- この科目は「通年4単位」の講義で、毎回の授業に対して180分の授業外学修をすることを意味します（1週間に3時間の自学自修が必要）。これは机に向かって勉強するだけでなく、CDやDVDを利用して作品を聴いたり、観たりする時間も自学自修に含まれます。
- 公欠や理由のある欠席の場合も求められる自学自修を行っておくこと。
- 遅刻は授業開始後20分以内、早退は授業終了前20分以内となる。それ以外は欠席とする。

教科書・参考書

【教科書】岸本宏子ほか『つながりと流れがよくわかる西洋音楽の歴史』アルテスパブリッシング

科目名－クラス名

基礎イタリア語

B

曜日時限

金 1時限

水 2時限

担当教員

森田 学

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	1～	通年	4		60	0	0	0	40	100

教育到達目標と概要

イタリア語を初めて学ぶ人を対象にした授業で、発音や文法の基礎知識と簡単な日常会話を学ぶとともに、背景にある文化に興味を広げることを目的とする。週2回の授業で、発音、性と数、人称による動詞の変化、文のかたちなど、イタリア語学修の基礎になる範囲を十分に時間をかけて丁寧に学ぶ。定期試験は筆記で行うが、授業時の練習や会話に積極的に取り組み、単語や短文を反復練習して欲しい。会話や文法に関する小テストは普段の学修の確認として授業中に行う。

学修成果

- ①イタリア語の発音を理解し、正しく発音することができる。
- ②簡単な日常会話などイタリア語でコミュニケーションができる。
- ③文法を知り、辞書を使って簡単なイタリア語の読み書きができる。
- ④イタリアの地理や文化に親しみ、さらなるイタリア語学修の基礎ができる。

授業展開と内容

- 第1回 学修にあたっての注意。あいさつ、イタリア語の特性、発音の特色、イタリア語の文化圏など
- 第2回 アルファベットと発音の仕方。発音はこの後の授業でも音読や会話とともに繰り返し練習する
- 第3回 名詞、冠詞、形容詞の性質を理解し、その実際を読み書きを通して練習し、覚える
- 第4回 動詞essereの直説法現在の変化を学ぶ。主語によって動詞が変化することと、主語になる人称代名詞を学ぶ
- 第5回 動詞avereの変化を学ぶ。動詞essereやavereのあるさまざまな表現を学びながら、使えるよう練習する
- 第6回 前置詞、冠詞のさまざまなかたち、指示代名詞、疑問詞などを学び、練習する
- 第7回 規則変化をする-are,-ere,-ire 動詞の直説法現在の変化を学ぶ
- 第8回 簡単な動詞を使いながら、主語+動詞+目的語など文の基本構成を理解する
- 第9回 会話に使える簡単な文で規則動詞の練習を続けながら、前置詞の働きやその種類についても学ぶ
- 第10回 会話に使える簡単な文で規則動詞の編集を続けながら、冠詞前置詞、所有形容詞についても学ぶ
- 第11回 数、時間、日付、曜日、月、季節、また家族の構成員の呼び方など、日常会話に必要な知識を覚える
- 第12回 簡単な日常会話での言い回しなどを復習しながら整理して覚え、使えるようにする
- 第13回 これまで学んだ単語やその使い方を整理して覚え、また実際に発音し、使えるようにする
- 第14回 これまでの復習と整理を通してイタリア語の基本的な文の形を理解し、多くの文例を覚える
- 第15回 前期の復習とまとめ
- 第16回 前期の復習。簡単な文法練習、会話練習を通じて、後期の展開に備える
- 第17回 不規則な変化をする動詞を学び、練習し、覚える
- 第18回 引き続き不規則な変化をする動詞を学び、練習し、覚える
- 第19回 従属動詞の使い方と変化を学び、練習する
- 第20回 これまで学んだ動詞を復習し、その変化と用法を文例とともに理解し、使えるようにする
- 第21回 人称代名詞の直接補語について学ぶ。それを理解し、使い方を練習する
- 第22回 人称代名詞の間接補語について学ぶ。それを理解し、使い方を練習する
- 第23回 人称代名詞の間接補語と直接補語の組み合わせを理解する。またne ci などの小詞の使い方を学ぶ
- 第24回 補語人称代名詞の使い方を動詞の変化とともに練習する
- 第25回 上記の練習と並行してイタリア語のさまざまな表現を学び、覚える
- 第26回 再帰動詞について学び、さまざまな再帰動詞の使い方を修得する
- 第27回 特に注意すべき動詞piacereなどを含め、動詞、補語人称代名詞などの復習
- 第28回 補助動詞と再帰動詞を使うときの注意について
- 第29回 動詞とともにこれまで学んだ前置詞の復習と整理を行う

履修上の注意

授業は水・金の週2回行われるが、この2回の授業を、同じ「基礎」ではあっても、他のクラスと組み合わせて受けることはできない。また教科書（テキストと辞書）とノートを必ず持参し、読み、書き、話す練習に積極的に参加すること。

文法解説は日本語で行われる。言語や文法用語に不安のある学生はそれなりの準備をして履修すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業を有効に使うためには授業外の予習・復習が欠かせない。習った文章は必ず音読し、反復練習の習慣をつけよう。

90分×2回の授業を前期15週・後期15週にわたって受講することで、1年間の学修時は90時間になります。加えて授業外学修（授業で学んだことを定着させるために自ら学ぶ）を90時間程度確保することで単位取得が可能になるレベルに到達できるでしょう。便宜上「基礎イタリア語」という名称がついていますが、「修得したい！」という強い意志と学びに対する希求が求められる講座です。

教科書・参考書**【教科書（テキスト&辞書）】**

堂浦律子「イタリア語文法徹底マスター」駿河台出版社

『伊和中辞典』（小学館）、『ブリーモ伊和辞典』（白水社）、『ポケットプログレッシブ伊和・和伊辞典』（小学館）

※ 辞書（教科書）については上記の3冊のうちどれか一冊を購入すること。声楽コースの学生は『伊和中辞典』の購入を推奨します。

※ 日本語以外が母語の学生は教員に相談して下さい。

科目名－クラス名

基礎イタリア語

D

曜日時限

金 3時限

水 1時限

担当教員

森田 学

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	1～	通年	4		60	0	0	0	40	100

教育到達目標と概要

イタリア語を初めて学ぶ人を対象にした授業で、発音や文法の基礎知識と簡単な日常会話を学ぶとともに、背景にある文化に興味を広げることを目的とする。週2回の授業で、発音、性と数、人称による動詞の変化、文のかたちなど、イタリア語学修の基礎になる範囲を十分に時間をかけて丁寧に学ぶ。定期試験は筆記で行うが、授業時の練習や会話に積極的に取り組み、単語や短文を反復練習して欲しい。会話や文法に関する小テストは普段の学修の確認として授業中に行う。

学修成果

- ①イタリア語の発音を理解し、正しく発音することができる。
- ②簡単な日常会話などイタリア語でコミュニケーションができる。
- ③文法を知り、辞書を使って簡単なイタリア語の読み書きができる。
- ④イタリアの地理や文化に親しみ、さらなるイタリア語学修の基礎ができる。

授業展開と内容

- 第1回 学修にあたっての注意。あいさつ、イタリア語の特性、発音の特色、イタリア語の文化圏など
- 第2回 アルファベットと発音の仕方。発音はこの後の授業でも音読や会話とともに繰り返し練習する
- 第3回 名詞、冠詞、形容詞の性質を理解し、その実際を読み書きを通して練習し、覚える
- 第4回 動詞essereの直説法現在の変化を学ぶ。主語によって動詞が変化することと、主語になる人称代名詞を学ぶ
- 第5回 動詞avereの変化を学ぶ。動詞essereやavereのあるさまざまな表現を学びながら、使えるよう練習する
- 第6回 前置詞、冠詞のさまざまなかたち、指示代名詞、疑問詞などを学び、練習する
- 第7回 規則変化をする-are,-ere,-ire 動詞の直説法現在の変化を学ぶ
- 第8回 簡単な動詞を使いながら、主語+動詞+目的語など文の基本構成を理解する
- 第9回 会話に使える簡単な文で規則動詞の練習を続けながら、前置詞の働きやその種類についても学ぶ
- 第10回 会話に使える簡単な文で規則動詞の編集を続けながら、冠詞前置詞、所有形容詞についても学ぶ
- 第11回 数、時間、日付、曜日、月、季節、また家族の構成員の呼び方など、日常会話に必要な知識を覚える
- 第12回 簡単な日常会話での言い回しなどを復習しながら整理して覚え、使えるようにする
- 第13回 これまで学んだ単語やその使い方を整理して覚え、また実際に発音し、使えるようにする
- 第14回 これまでの復習と整理を通してイタリア語の基本的な文の形を理解し、多くの文例を覚える
- 第15回 前期の復習とまとめ
- 第16回 前期の復習。簡単な文法練習、会話練習を通じて、後期の展開に備える
- 第17回 不規則な変化をする動詞を学び、練習し、覚える
- 第18回 引き続き不規則な変化をする動詞を学び、練習し、覚える
- 第19回 従属動詞の使い方と変化を学び、練習する
- 第20回 これまで学んだ動詞を復習し、その変化と用法を文例とともに理解し、使えるようにする
- 第21回 人称代名詞の直接補語について学ぶ。それを理解し、使い方を練習する
- 第22回 人称代名詞の間接補語について学ぶ。それを理解し、使い方を練習する
- 第23回 人称代名詞の間接補語と直接補語の組み合わせを理解する。またne ci などの小詞の使い方を学ぶ
- 第24回 補語人称代名詞の使い方を動詞の変化とともに練習する
- 第25回 上記の練習と並行してイタリア語のさまざまな表現を学び、覚える
- 第26回 再帰動詞について学び、さまざまな再帰動詞の使い方を修得する
- 第27回 特に注意すべき動詞piacereなどを含め、動詞、補語人称代名詞などの復習
- 第28回 補助動詞と再帰動詞を使うときの注意について
- 第29回 動詞とともにこれまで学んだ前置詞の復習と整理を行う

履修上の注意

授業は水・金の週2回行われるが、この2回の授業を、同じ「基礎」ではあっても、他のクラスと組み合わせて受けることはできない。また教科書（テキストと辞書）とノートを必ず持参し、読み、書き、話す練習に積極的に参加すること。

文法解説は日本語で行われる。言語や文法用語に不安のある学生はそれなりの準備をして履修すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業を有効に使うためには授業外の予習・復習が欠かせない。習った文章は必ず音読し、反復練習の習慣をつけよう。

90分×2回の授業を前期15週・後期15週にわたって受講することで、1年間の学修時は90時間になります。加えて授業外学修（授業で学んだことを定着させるために自ら学ぶ）を90時間程度確保することで単位取得が可能になるレベルに到達できるでしょう。便宜上「基礎イタリア語」という名称がついていますが、「修得したい！」という強い意志と学びに対する希求が求められる講座です。

教科書・参考書**【教科書（テキスト&辞書）】**

堂浦律子「イタリア語文法徹底マスター」駿河台出版社

『伊和中辞典』（小学館）、『ブリーモ伊和辞典』（白水社）、『ポケットプログレッシブ伊和・和伊辞典』（小学館）

※ 辞書（教科書）については上記の3冊のうちどれか一冊を購入すること。声楽コースの学生は『伊和中辞典』の購入を推奨します。

※ 日本語以外が母語の学生は教員に相談して下さい。

科目名－クラス名

基礎イタリア語

B

曜日時限

金 1時限

水 2時限

担当教員

森田 学

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	1～	通年	4		60	0	0	0	40	100

教育到達目標と概要

イタリア語を初めて学ぶ人を対象にした授業で、発音や文法の基礎知識と簡単な日常会話を学ぶとともに、背景にある文化に興味を広げることを目的とする。週2回の授業で、発音、性と数、人称による動詞の変化、文のかたちなど、イタリア語学修の基礎になる範囲を十分に時間をかけて丁寧に学ぶ。定期試験は筆記で行うが、授業時の練習や会話に積極的に取り組み、単語や短文を反復練習して欲しい。会話や文法に関する小テストは普段の学修の確認として授業中に行う。

学修成果

- ①イタリア語の発音を理解し、正しく発音することができる。
- ②簡単な日常会話などイタリア語でコミュニケーションができる。
- ③文法を知り、辞書を使って簡単なイタリア語の読み書きができる。
- ④イタリアの地理や文化に親しみ、さらなるイタリア語学修の基礎ができる。

授業展開と内容

- 第1回 学修にあたっての注意。あいさつ、イタリア語の特性、発音の特色、イタリア語の文化圏など
- 第2回 アルファベットと発音の仕方。発音はこの後の授業でも音読や会話とともに繰り返し練習する
- 第3回 名詞、冠詞、形容詞の性質を理解し、その実際を読み書きを通して練習し、覚える
- 第4回 動詞essereの直説法現在の変化を学ぶ。主語によって動詞が変化することと、主語になる人称代名詞を学ぶ
- 第5回 動詞avereの変化を学ぶ。動詞essereやavereのあるさまざまな表現を学びながら、使えるよう練習する
- 第6回 前置詞、冠詞のさまざまなかたち、指示代名詞、疑問詞などを学び、練習する
- 第7回 規則変化をする-are,-ere,-ire 動詞の直説法現在の変化を学ぶ
- 第8回 簡単な動詞を使いながら、主語+動詞+目的語など文の基本構成を理解する
- 第9回 会話に使える簡単な文で規則動詞の練習を続けながら、前置詞の働きやその種類についても学ぶ
- 第10回 会話に使える簡単な文で規則動詞の編集を続けながら、冠詞前置詞、所有形容詞についても学ぶ
- 第11回 数、時間、日付、曜日、月、季節、また家族の構成員の呼び方など、日常会話に必要な知識を覚える
- 第12回 簡単な日常会話での言い回しなどを復習しながら整理して覚え、使えるようにする
- 第13回 これまで学んだ単語やその使い方を整理して覚え、また実際に発音し、使えるようにする
- 第14回 これまでの復習と整理を通してイタリア語の基本的な文の形を理解し、多くの文例を覚える
- 第15回 前期の復習とまとめ
- 第16回 前期の復習。簡単な文法練習、会話練習を通じて、後期の展開に備える
- 第17回 不規則な変化をする動詞を学び、練習し、覚える
- 第18回 引き続き不規則な変化をする動詞を学び、練習し、覚える
- 第19回 従属動詞の使い方と変化を学び、練習する
- 第20回 これまで学んだ動詞を復習し、その変化と用法を文例とともに理解し、使えるようにする
- 第21回 人称代名詞の直接補語について学ぶ。それを理解し、使い方を練習する
- 第22回 人称代名詞の間接補語について学ぶ。それを理解し、使い方を練習する
- 第23回 人称代名詞の間接補語と直接補語の組み合わせを理解する。またne ci などの小詞の使い方を学ぶ
- 第24回 補語人称代名詞の使い方を動詞の変化とともに練習する
- 第25回 上記の練習と並行してイタリア語のさまざまな表現を学び、覚える
- 第26回 再帰動詞について学び、さまざまな再帰動詞の使い方を修得する
- 第27回 特に注意すべき動詞piacereなどを含め、動詞、補語人称代名詞などの復習
- 第28回 補助動詞と再帰動詞を使うときの注意について
- 第29回 動詞とともにこれまで学んだ前置詞の復習と整理を行う

履修上の注意

授業は水・金の週2回行われるが、この2回の授業を、同じ「基礎」ではあっても、他のクラスと組み合わせて受けることはできない。また教科書（テキストと辞書）とノートを必ず持参し、読み、書き、話す練習に積極的に参加すること。

文法解説は日本語で行われる。言語や文法用語に不安のある学生はそれなりの準備をして履修すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業を有効に使うためには授業外の予習・復習が欠かせない。習った文章は必ず音読し、反復練習の習慣をつけよう。

90分×2回の授業を前期15週・後期15週にわたって受講することで、1年間の学修時は90時間になります。加えて授業外学修（授業で学んだことを定着させるために自ら学ぶ）を90時間程度確保することで単位取得が可能になるレベルに到達できるでしょう。便宜上「基礎イタリア語」という名称がついていますが、「修得したい！」という強い意志と学びに対する希求が求められる講座です。

教科書・参考書**【教科書（テキスト&辞書）】**

堂浦律子「イタリア語文法徹底マスター」駿河台出版社

『伊和中辞典』（小学館）、『プリーモ伊和辞典』（白水社）、『ポケットプログレッシブ伊和・和伊辞典』（小学館）

※ 辞書（教科書）については上記の3冊のうちどれか一冊を購入すること。声楽コースの学生は『伊和中辞典』の購入を推奨します。

※ 日本語以外が母語の学生は教員に相談して下さい。

科目名－クラス名

基礎イタリア語

D

曜日時限

金 3時限

水 1時限

担当教員

森田 学

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	1～	通年	4		60	0	0	0	40	100

教育到達目標と概要

イタリア語を初めて学ぶ人を対象にした授業で、発音や文法の基礎知識と簡単な日常会話を学ぶとともに、背景にある文化に興味を広げることを目的とする。週2回の授業で、発音、性と数、人称による動詞の変化、文のかたちなど、イタリア語学修の基礎になる範囲を十分に時間をかけて丁寧に学ぶ。定期試験は筆記で行うが、授業時の練習や会話に積極的に取り組み、単語や短文を反復練習して欲しい。会話や文法に関する小テストは普段の学修の確認として授業中に行う。

学修成果

- ①イタリア語の発音を理解し、正しく発音することができる。
- ②簡単な日常会話などイタリア語でコミュニケーションができる。
- ③文法を知り、辞書を使って簡単なイタリア語の読み書きができる。
- ④イタリアの地理や文化に親しみ、さらなるイタリア語学修の基礎ができる。

授業展開と内容

- 第1回 学修にあたっての注意。あいさつ、イタリア語の特性、発音の特色、イタリア語の文化圏など
- 第2回 アルファベットと発音の仕方。発音はこの後の授業でも音読や会話とともに繰り返し練習する
- 第3回 名詞、冠詞、形容詞の性質を理解し、その実際を読み書きを通して練習し、覚える
- 第4回 動詞essereの直説法現在の変化を学ぶ。主語によって動詞が変化することと、主語になる人称代名詞を学ぶ
- 第5回 動詞avereの変化を学ぶ。動詞essereやavereのあるさまざまな表現を学びながら、使えるよう練習する
- 第6回 前置詞、冠詞のさまざまなかたち、指示代名詞、疑問詞などを学び、練習する
- 第7回 規則変化をする-are,-ere,-ire 動詞の直説法現在の変化を学ぶ
- 第8回 簡単な動詞を使いながら、主語+動詞+目的語など文の基本構成を理解する
- 第9回 会話に使える簡単な文で規則動詞の練習を続けながら、前置詞の働きやその種類についても学ぶ
- 第10回 会話に使える簡単な文で規則動詞の編集を続けながら、冠詞前置詞、所有形容詞についても学ぶ
- 第11回 数、時間、日付、曜日、月、季節、また家族の構成員の呼び方など、日常会話に必要な知識を覚える
- 第12回 簡単な日常会話での言い回しなどを復習しながら整理して覚え、使えるようにする
- 第13回 これまで学んだ単語やその使い方を整理して覚え、また実際に発音し、使えるようにする
- 第14回 これまでの復習と整理を通してイタリア語の基本的な文の形を理解し、多くの文例を覚える
- 第15回 前期の復習とまとめ
- 第16回 前期の復習。簡単な文法練習、会話練習を通じて、後期の展開に備える
- 第17回 不規則な変化をする動詞を学び、練習し、覚える
- 第18回 引き続き不規則な変化をする動詞を学び、練習し、覚える
- 第19回 従属動詞の使い方と変化を学び、練習する
- 第20回 これまで学んだ動詞を復習し、その変化と用法を文例とともに理解し、使えるようにする
- 第21回 人称代名詞の直接補語について学ぶ。それを理解し、使い方を練習する
- 第22回 人称代名詞の間接補語について学ぶ。それを理解し、使い方を練習する
- 第23回 人称代名詞の間接補語と直接補語の組み合わせを理解する。またne ci などの小詞の使い方を学ぶ
- 第24回 補語人称代名詞の使い方を動詞の変化とともに練習する
- 第25回 上記の練習と並行してイタリア語のさまざまな表現を学び、覚える
- 第26回 再帰動詞について学び、さまざまな再帰動詞の使い方を修得する
- 第27回 特に注意すべき動詞piacereなどを含め、動詞、補語人称代名詞などの復習
- 第28回 補助動詞と再帰動詞を使うときの注意について
- 第29回 動詞とともにこれまで学んだ前置詞の復習と整理を行う

履修上の注意

授業は水・金の週2回行われるが、この2回の授業を、同じ「基礎」ではあっても、他のクラスと組み合わせて受けることはできない。また教科書（テキストと辞書）とノートを必ず持参し、読み、書き、話す練習に積極的に参加すること。

文法解説は日本語で行われる。言語や文法用語に不安のある学生はそれなりの準備をして履修すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業を有効に使うためには授業外の予習・復習が欠かせない。習った文章は必ず音読し、反復練習の習慣をつけよう。

90分×2回の授業を前期15週・後期15週にわたって受講することで、1年間の学修時は90時間になります。加えて授業外学修（授業で学んだことを定着させるために自ら学ぶ）を90時間程度確保することで単位取得が可能になるレベルに到達できるでしょう。便宜上「基礎イタリア語」という名称がついていますが、「修得したい！」という強い意志と学びに対する希求が求められる講座です。

教科書・参考書**【教科書（テキスト&辞書）】**

堂浦律子「イタリア語文法徹底マスター」駿河台出版社

『伊和中辞典』（小学館）、『ブリーモ伊和辞典』（白水社）、『ポケットプログレッシブ伊和・和伊辞典』（小学館）

※ 辞書（教科書）については上記の3冊のうちどれか一冊を購入すること。声楽コースの学生は『伊和中辞典』の購入を推奨します。

※ 日本語以外が母語の学生は教員に相談して下さい。

科目名－クラス名

初級イタリア語

B

曜日時限

火 2時限

金 2時限

担当教員

森田 学

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	2～	通年	4		70	0	0	0	30	100

教育到達目標と概要

基礎イタリア語の既修者を対象にした授業で、イタリア語という言語の仕組みの基本を学ぶことを目的とする。基礎イタリア語からの発展で、「時制」や「法」によって表現できる内容やニュアンスは飛躍的に広がるので、文法知識とニュアンスの関連の重要性を丁寧に学ぶ。教室ではまず理解することを重要視して丁寧に説明する。並行して多くの単語や短文を覚え、辞書を引く方法も学ぶ。定期試験は筆記で、学んだ内容の理解と習熟を求める。授業内小テストは普段の学修の確認である。

学修成果

①正しい発音によって簡単なコミュニケーションができる。②簡単なイタリア語の読み書きができ、表現のニュアンスの違いを理解できる。③イタリア語を独習できる程度のしっかりした文法知識を身に付ける。④イタリアの歴史や文化に関する知識を蓄積する。

授業展開と内容

- 第1回 基礎イタリア語の全般的な復習。とくに動詞の変化、日常で使われる簡単な表現など
- 第2回 さまざまな比較の表現、最上級について
- 第3回 直説法近過去 補助動詞としてのessereとavereの働き。過去分詞について
- 第4回 直説法近過去 過去分詞の作り方、不規則動詞の過去分詞を覚える
- 第5回 直説法近過去 近過去の文に慣れ、さまざまな文例を覚える
- 第6回 直説法近過去 補助動詞をともなった場合、再帰動詞の場合
- 第7回 近過去の総合的な復習と並行して、さまざまなイタリア語の表現を学ぶ
- 第8回 直説法半過去 半過去の動詞変化のかたちと、用法を学ぶ
- 第9回 直説法半過去 近過去との使い分けをさまざまな文例で学ぶ
- 第10回 関係代名詞 che, cuiの役割と働きをさまざまな実例によって理解する
- 第11回 関係代名詞cuiの所有形容詞としての用法、関係副詞dove, quandoなど
- 第12回 関係代名詞を使ったさまざまな文に慣れ、簡単な表現が使えるようにする
- 第13回 動詞の非人称用法を学ぶ（接続法を使う構文は後期に回す）
- 第14回 受動態について（過去分詞を使うかたち、siを使った受動態）
- 第15回 前期の復習とまとめ
- 第16回 前期の復習。とくに直説法近過去と半過去の使い分けを中心に
- 第17回 直説法大過去の動詞変化と用法を学ぶ
- 第18回 直説法大過去の用法について。時制を理解し、半過去、近過去との違いと使い分けを学ぶ
- 第19回 直説法単純未来。用法を理解し、文例を覚える
- 第20回 先立未来（前未来）の用法を理解し、文例を覚える
- 第21回 ジェルンディオの用法を理解し、文例を覚える
- 第22回 ジェルンディオのさまざまな使い方を理解する
- 第23回 命令法について 命令法の動詞の変化形と、その用法を学ぶ
- 第24回 命令法について 使い方に慣れながら補語人称代名詞との関連も学ぶ
- 第25回 条件法について、動詞の変化とその代表的な用法を学ぶ 過去未来
- 第26回 接続法について 動詞の変化とその代表的な用法を学ぶ
- 第27回 不定法について その他の重要な文法事項
- 第28回 直説法遠過去について 動詞の変化とその用法を知る
- 第29回 基礎・初級文法事項をふり返りつつ身についたイタリア語の力を確認する
- 第30回 一年間の総まとめ

履修上の注意

授業は週に2回行われるが（原則は水・金、ただし変則的な場合がある）、この2回の授業を、同じ「初級」ではあっても、他のクラスと組み合わせることはできない。

なおクラスは能力レベルで分けているため基礎の担当教員の持ち上がりではないので注意すること。また教科書とノートを必ず持参し、読み、書き、話す練習に積極的に参加すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

☆語学は反復練習なしでは上達しない。授業は予習・復習・課題等、授業外学修を前提に進行する。

☆教科書および配付プリントの文章や練習問題等は、何度も読み、書き、発音し、覚えることが重要。授業時間90分×週2回×前後期合わせて30回＝90時間＋授業外学修として授業時間数と同じ90時間を使って学ぶことで到達できる科目である。

☆授業時間90分×週2回×前後期合わせて30回＝90時間＋授業外学修として授業時間数と同じ90時間を使って学ぶことで到達できる科目である（年間180時間＝授業90時間＋予復習90時間）

教科書・参考書

【教科書】「基礎イタリア語」と同じ教科書2点

堂浦律子「イタリア語文法徹底マスター」駿河台出版社

『伊和中辞典』（小学館）

科目名－クラス名

初級イタリア語

B

曜日時限

火 2時限
金 2時限

担当教員

森田 学

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	2～	通年	4		70	0	0	0	30	100

教育到達目標と概要

基礎イタリア語の既修者を対象にした授業で、イタリア語という言葉の仕組みの基本を学ぶことを目的とする。基礎イタリア語からの発展で、「時制」や「法」によって表現できる内容やニュアンスは飛躍的に広がるので、文法知識とニュアンスの関連の重要性を丁寧に学ぶ。教室ではまず理解することを重要視して丁寧に説明する。並行して多くの単語や短文を覚え、辞書を引く方法も学ぶ。定期試験は筆記で、学んだ内容の理解と習熟を求める。授業内小テストは普段の学修の確認である。

学修成果

①正しい発音によって簡単なコミュニケーションができる。②簡単なイタリア語の読み書きができ、表現のニュアンスの違いを理解できる。③イタリア語を独習できる程度のしっかりした文法知識を身に付ける。④イタリアの歴史や文化に関する知識を蓄積する。

授業展開と内容

- 第1回 基礎イタリア語の全般的な復習。とくに動詞の変化、日常で使われる簡単な表現など
- 第2回 さまざまな比較の表現、最上級について
- 第3回 直説法近過去 補助動詞としてのessereとavereの働き。過去分詞について
- 第4回 直説法近過去 過去分詞の作り方、不規則動詞の過去分詞を覚える
- 第5回 直説法近過去 近過去の文に慣れ、さまざまな文例を覚える
- 第6回 直説法近過去 補助動詞をともなった場合、再帰動詞の場合
- 第7回 近過去の総合的な復習と並行して、さまざまなイタリア語の表現を学ぶ
- 第8回 直説法半過去 半過去の動詞変化のかたちと、用法を学ぶ
- 第9回 直説法半過去 近過去との使い分けをさまざまな文例で学ぶ
- 第10回 関係代名詞 che, cuiの役割と働きをさまざまな実例によって理解する
- 第11回 関係代名詞cuiの所有形容詞としての用法、関係副詞dove, quandoなど
- 第12回 関係代名詞を使ったさまざまな文に慣れ、簡単な表現が使えるようにする
- 第13回 動詞の非人称用法を学ぶ（接続法を使う構文は後期に回す）
- 第14回 受動態について（過去分詞を使うかたち、siを使った受動態）
- 第15回 前期の復習とまとめ
- 第16回 前期の復習。とくに直説法近過去と半過去の使い分けを中心に
- 第17回 直説法大過去の動詞変化と用法を学ぶ
- 第18回 直説法大過去の用法について。時制を理解し、半過去、近過去との違いと使い分けを学ぶ
- 第19回 直説法単純未来。用法を理解し、文例を覚える
- 第20回 先立未来（前未来）の用法を理解し、文例を覚える
- 第21回 ジェルンディオの用法を理解し、文例を覚える
- 第22回 ジェルンディオのさまざまな使い方を理解する
- 第23回 命令法について 命令法の動詞の変化形と、その用法を学ぶ
- 第24回 命令法について 使い方に慣れながら補語人称代名詞との関連も学ぶ
- 第25回 条件法について、動詞の変化とその代表的な用法を学ぶ 過去未来
- 第26回 接続法について 動詞の変化とその代表的な用法を学ぶ
- 第27回 不定法について その他の重要な文法事項
- 第28回 直説法遠過去について 動詞の変化とその用法を知る
- 第29回 基礎・初級文法事項をふり返りつつ身についたイタリア語の力を確認する
- 第30回 一年間の総まとめ

履修上の注意

授業は週に2回行われるが（原則は水・金、ただし変則的な場合がある）、この2回の授業を、同じ「初級」ではあっても、他のクラスと組み合わせることはできない。

なおクラスは能力レベルで分けているため基礎の担当教員の持ち上がりではないので注意すること。また教科書とノートを必ず持参し、読み、書き、話す練習に積極的に参加すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

☆語学は反復練習なしでは上達しない。授業は予習・復習・課題等、授業外学修を前提に進行する。

☆教科書および配付プリントの文章や練習問題等は、何度も読み、書き、発音し、覚えることが重要。授業時間90分×週2回×前後期合わせて30回＝90時間＋授業外学修として授業時間数と同じ90時間を使って学ぶことで到達できる科目である。

☆授業時間90分×週2回×前後期合わせて30回＝90時間＋授業外学修として授業時間数と同じ90時間を使って学ぶことで到達できる科目である（年間180時間＝授業90時間＋予復習90時間）

教科書・参考書

【教科書】「基礎イタリア語」と同じ教科書2点

堂浦律子「イタリア語文法徹底マスター」駿河台出版社

『伊和中辞典』（小学館）

2022年度(前期)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：2924 教員名：森田 学

1) 評価結果に対する所見

今回、大学院科目「原典講読研究Ⅰ(伊語)」と「舞台発声研究(伊語)」に対するアンケート結果を受け取りました。いずれも大学院科目であることから履修者は10名程度と少数クラスであることから、個々の学生に目を配ることができ、それがアンケート結果にも繋がっていると思われれます。

自由記述欄にもあるように、学生が授業を受けて「何が自分には足りないのか」を自覚し、授業外学習で何をすべきなのかを考えていることが科目の目標達成(自分で辞書を引いて文の構文と意味を考えることができる)を示していて、授業改善の工夫が結果として現れたと考えています。

イタリア語の基本文法を学んでいることを履修の基本条件としていましたが、学生本人が努力をして授業に臨むという強い意思を持っていたため履修中止を進めなかった。今回のアンケート結果では「それぞれの学生の読解力に合わせて授業を進めた」ことが評価されました。

2) 要望への対応・改善方策

自由記述欄に授業や教員に対する要望は記載されていなかった点は自己評価できると思われれます。

3) 今後の課題

アンケート解答率が極端に低い(20パーセント)科目がありましたが、これは最終授業が実技系の試演会と重なったことが理由と考えられます。授業を欠席した場合でもアンケートに回答できること、回答することでその結果が授業改善に役立てられることをチームや学生を通じて伝えたが回答結果に反映することができなかった。個々の科目だけでなく、全学的に学生自身のための、教員と共により良い学びを実現するために必要なアンケートであることを根気強く伝えて行く必要があると思います。

イタリア語の文法をしっかりと学んでいない学生の履修に関しては、履修者間で理解の差が大きくなったり、履修者数が増える場合には臨機応変に慎重な判断が必要になると考えています。

以上

2022年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：2924 教員名：森田 学

1) 評価結果に対する所見

Q1の「シラバスを読み、教育目標と学修成果を理解している」かどうかを「そう思う、少し思う」が大半を占めるようになってきた一方で、Q8の「授業の予習・復習」をしているでは「あまり思わない、思わない」と回答する学生が一定数いる。

選択必修科目においてQ5「興味や関心を持って授業に出席」することで、Q9「授業を受けて、ものの見方や考え方」を広げることにつながるサイクルを確立できている学生とまだできていない学生がいることが数値から読み取れた。

2) 要望への対応・改善方策

自由記述欄に記入する学生はおおむね積極的かつ能動的に学べており、教員側としても非常に嬉しく、力になるコメントで占められていた。

言葉として記載されていない部分を数値から読み取ってみると、「教育目標と学修成果」が学生の学修意欲によって自ら達成すべきもの（主体的な学び）だということを学生に伝える必要がある。また、授業への「興味や関心」についても個人の好みや趣向だと学生が捉えているとすれば、この点も根気強く「大学の学び（3つのポリシー）」について噛み砕いて説明する必要があるのかもしれない。

3) 今後の課題

これまでは「授業評価アンケート」という名称から、学生の満足度を調査する、といったニュアンスで受け取られていた面もあるだろう。今後は新名称「授業アンケート」となったことで、学生と教員による授業の振り返りという目的がしっかりと共有されることを目指したい。

現在は多様な背景を持つ学生が学内に集っていることが教職員間でも認識されつつあり、このような情報を共有しつつ、より良い授業を実施して行きたい。

以上